

授業探訪

総合系科目・学びの精神「なぜ外国語を学ぶのか？」

複言語・複文化主義入門：「ことば」について考える

外国語教育研究センター教授 泉水 浩隆

立教大学では「言語 B」と呼ばれる、いわゆる「第 2 外国語」科目は、その 1 つでもあるスペイン語を担当する筆者の私見ではあるが、大学教育の現場において現在あまり旗色がよいとは言えないように思われる。筆者がこれまで教鞭をとってきたいくつかの大学でも、例えば、ある学部では第 2 外国語をまったく履修しなくてもよくなっていたり、第 2 外国語の代わりに英語科目の単位を卒業単位として充当することができたり、第 2 外国語として選択できる言語の数を減らしたり、第 2 外国語の開講クラス数が削減されたりといった状況が見られた。

そんな風潮の中で、立教大学ではすべての学部で言語 B の必修科目が設定され、さらにレベルや性格の異なる自由科目が数多く開講されているという、言語学習に興味のある人にとってはまたとない環境が整備されている。言語 B として提供されている言語には、他大学でもよく見られるドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語、朝鮮語、ロシア語、留学生向けの日本語に加え、ポルトガル語（ブラジル）、タイ語、ベトナム語、インドネシア語、タガログ語、日本手話など、学習機会が必ずしも多いとは言えない言語もある。さらに特筆すべきなのは、ただ言語そのものを学習すればよいということではなく、その根底で現代社会における複言語・複文化の重要性が意識されているという点である。

言語を学ぶということは、その文法構造を知ったり、簡単なあいさつができたりすれば事足りるというものではない。もちろんそうした要素も言語学習の中で大切なことであることは事実だが、少なくとも大学における言語教育においては、それに加えて、いろいろな言語の裏にあるものの見方や考え方の相違点や類似点、その言語を使っている人たちの生活、同じ言語圏の中にも存在する差異、これらによってもたらされる文化的な豊かさの一端に触れるという機会があるべきであろう。さらには、他の言語を学ぶことによって、自らの言語や文化の特性を振り返ることができるということも重要なポイントの一つである。

これを踏まえ、筆者が 2025 年度春学期に新座キャンパスにおいて担当した「なぜ外国語を学ぶのか」では、特定の言語そのものや言語を学ぶノウハウを扱うというより、言語 B を学ぶための基盤として想定されている複言語・複文化的考え方やそれに関わるさまざまな要素を紹介し、ことばを学ぶことの意義やことばに関わる不思議を一般的な視点から考えてもらおう、さらにそれを各学生が学んでいる言語 B 学習への動機付けの一つとしてとらえてもらおうということをもっとも重要な目標として掲げた。

などと、大上段に構えてはみたものの、筆者の浅学非才を考慮すれば、立教大学で開講されている各言語の、特に文化的な事象に関わるようなことを深く解説することはもとより叶うべくもない。ふだんスペイン語学を中心とする言語学に関わるテーマを研究対象として扱っている自分にできることは何だろうかと考えた結果、やはりことばの特性や特徴を扱うしかないだろうという結論に落ち着いた。そこで、立教大学における関連のありそうないろんな科目のシラバスを拝見し、ことばというものが持つ特徴を考えてみる科目がもっとあってもよいのではないかと思ったので、その方向性で授業を組み立てることにした。ともすれば「言語学入門」的なコースになってしまった感もなきにしもあらずだが、複言語・複文化的な考え方やさまざまな言語の文字、ことばの地域差や世代差、ことばを教える・学ぶといったテーマも取り入れることで、この科目が持つべき「らしさ」を盛り込めるようにした。

第1回目の授業では、これまで英語以外の言語に触れたことのある受講生は少数であろうことを想定し、ことばについてあらためて見直しつつ、複数の言語や複数の文化を知るといえるのはどういうことなのか考えてみる機会を設けた。例えば、大学に入りたての受講生は「英語＝国際語」という意識を何となく持っていると思われるが、「国際語」とはそもそも何なのか、使用人口、使用エリア、使用場面などから見て、英語以外にどのような言語が広く用いられているのか紹介した。また、「son, superior, manual, culturalは何と読むでしょうか?」と問いかけ、当然受講生は英語の読み方で答えたが、実はスペイン語にも同じ形の語があるけれどこう発音するんだよ、とか、同じように「important, centre, pardon, coinは何と読むでしょうか?」と聞いたところ（centreがイギリス綴りになっているところがヒント）、受講生はやはり英語の読み方で読んだが、フランス語で読むとだいぶ違う音になるということを説明したところ、いずれも「へえ」という反応だった。さらに、日本語と英語だと、音声面だけではなく、語彙や文法もかなりの距離があるが、例えば、朝鮮語なら語順も似ていて、とっつきやすい部分がある、音楽や絵画、食べ物やファッションなどと同じように、外国語との相性もあるのだから、英語に限らずいろいろな言語にトライしてみないと相性は分からない、相性のよい外国語を見つけましょう、というような話をし、最後にすべての言語を完璧にする必要はない、レベルの差はあっても、いくつかの言語を使えることは大切なことであるという、複言語主義的思考方を紹介してしめくくりとした。

第2回以降しばらくは、音声・音韻、統語、形態、意味など、ことばの構造的な部分についての話をした。筆者はスペイン語学、とりわけスペイン語音声を中心に研究を続けているため、つい深入りしそうなだったが、その誘惑を極力抑え、実際に声を出して見て、どんなところで音が出ているか、また、音叉を鳴らしてみてもその音がどう伝わっていくか、いずれも体験を通して確認してみたり、日本語の「ん」という文字で表される音はすべて同じなのかどうか、違うとすればその理由は何か、なぜ同じと思えるのかを考えてみたりした。こうした疑問に対する受講生の意見を直接聞く機会があればと思って、そのための一つの方法としてグループディスカッションを考えていたのだが、

このクラスには60名以上の登録があり、授業中ディスカッションを行ったとして意見交換が果たして成り立つのだろうかとも危惧していた。が、池袋で同様の科目を担当した町先生の示唆により、それは問題なく可能であるとの情報を得たので、第2回以降、授業中適宜グループディスカッションの時間を入れ、筆者が机の間を回りながらランダムに受講生にマイクを向けてディスカッションで出た意見を聞くという冒険を試みた。そうしたところ、確かにしっかりした意見を述べてくれる受講生がほとんどだったので、その後も安心してこの方法をとることにした。さらに、各回終了後にリアクションペーパーの課題を出し、それをCanvas LMSを通じて提出してもらい、面白い意見や興味深い感想があった場合、誰の意見かは伏せてその次の授業の冒頭でそれを紹介した。後に行われたアンケートで、「紹介されてうれしかった」とか「励みになった」という意見もいただいたので、この方法は意外に効果的だったのかもしれないと感じている。

ディスカッションやリアクションペーパーで面白かった意見もいろいろあったが、その一例として、第4回で形態論における生産性を扱った時のことが挙げられる。「大きさ」に含まれる「～さ」は、「小ささ」「少なさ」「多さ」「優しさ」など多くの語を作ることができ、「生産性が高い」と言われるが、その一方で「真っ黒」や「真っ青」に含まれる「真」は必ずしもそうではなく、生産性は低い。例えば、「真緑」や「真紫」、「真ピンク」は筆者の言語感覚では不可である。が、受講生のリアクションペーパーの中にこれら（中のいくつか）を可とする意見が複数あり、これについてはもしかすると世代間での言語感覚がずれてきているのかもしれないと新たな研究課題が見つかった気がした。

統語論については、いわゆる伝統文法的概念から現代言語学までわずかな回数で走り抜け、また筆者があまり得意とする分野ではないこともあり、少々消化不良になってしまったと反省している。また、時間的制約もあって、意味論、語用論も重要な部分だけざっとさらうような形になってしまったので、申し訳なく思っている。この点については、現在、来年度以降もう少しうまく工夫できないものかとあれこれ考えている最中である。

ここまではやや抽象的な内容を扱わざるを得なかったのが、受講生もどこへ向かっているのだろうと不安になったかもしれないと思うが、第9回でいろいろな文字を扱った際は具体的な例が多かったせいか、受講生も自分が履修している言語ではない言語でどのような文字が使われているのかを知り、文字の持つ多様性と意外性に触れることができたようである。例えば、我々がアラビア数字と呼んでいる算用数字(1, 2, 3...)は、アラビア語圏では١, ٢, ٣...のように異なる形で表記されるとか、ハングル文字がどのように作られ、文字の形が何をかたどっているのかなどという話題は興味を引いたようである。リアクションペーパーでは、読むと同じ音である「可愛い」「かわいい」「カワイイ」が書き方でどうニュアンスが異なるのかについて論じた受講生もいた。

第10回では、言語の系統や移り変わりを扱い、特にロマンス諸語の分布とラテン語から俗ラテン語を経て、フランス語やスペイン語、イタリア語、ポルトガル語等へ変化していく様子を説明した。また、第11回では、地域差や世代差によることばのバリエー



ションを見たが、グループディスカッションの中で受講生の出身地で使われる独特な語彙や表現の例を紹介し合っているのを見て、こちらも楽しかった。また、リアクションペーパーの中でもいろいろな実例を出してくれていたの、今後授業の素材としても使えそうである。

第12回では、言語接触をテーマとし、バイリンガリズムやダイグロシア、ピジン、クレオールなど、2つ以上の言語が接触するとどのような現象が起こるかについて紹介した。第13回では、これまでのまとめとして日本における第2外国語教育を巡る諸問題についてさまざまな角度から論じた。最後の2回は、複言語・複文化主義にも深く関わる内容であり、筆者としてはこれらのテーマをもってこの講義全体を締めくくりたいと考えていたものであった。

このように半期でさまざまな角度からことばというものを考える機会を持ってもらいたいと考えて設計したこの授業であるが、複言語・複文化科目WGの先生方が作ってくださったアンケートの中で次のような回答が得られたことが担当者としては望外の喜びであった。「今四年生でこの授業を受けたが、一年生のときにもしこの講義があって、受けとけば外国語学習への意欲が大きくなっていただろうな、と思った。私は第二外国語を2年生の途中で諦めてしまったが、この授業をもっと早く受けてたら継続学習を頑張れたと思った。よって、一年生の受講者が多い学びの精神でこの授業が展開されるのはいいことだと思った。言語と音声のところなど、ちょくちょく難しすぎて意味がわからない部分があったが、外国語を学ぶことは言語の域をこえて人間関係などにも影響しうるということをきちんと学べたのは大学生生活で大きな財産になったと思う。社会人になっても、外国語の勉強にチャレンジしたいと思えた。短い期間でしたがありがとうございました」(原文ママ) この意見に示されているように、この科目がなぜ「学び

の精神」の中に設定され、どういう意義を持っているものなのか、正しく理解してくれた受講生がいたことが本当にありがたいことだと感じている。再びこのような感想を持ってもらえるよう、今後も内容をさらにブラッシュアップして行きたいと考える。

せんすい ひろたか